

私の保育

朝のよるいび



朝の園庭はその日の始まりをまつ顔である。公立幼稚園を転任するごとに、それぞれの庭に特徴があるが、朝の庭はみな一様に張切っている。園庭を通る子どもたちの声が、その日の始まりを上げるまでの庭のひとつときの静けさが、忙しく朝の仕事に飛びまわっている私にとっては、心休まるのである。

朝早くつつじのつぼみがほころびかけ、パンジーの枯れたのをつまむ時、子どもの感動する姿がそこにあることを思う。

雨の朝、パンジーが雨に打たれてふるえているのを見た子どもたちのなかで、リズム表現の時両手を出して花を表現していた十本の指がわかるがわる動き、実に雨のパンジーを再現していたのには驚かされた。

子どもは目ざとく、庭の小さな変化でも知らせてくれる。「先生芽が出ているよ」という声で、「どれどれ」といいながらあ

とについて行くと、庭のすみの芝生の切れたあたりにクロッカスの芽が、ちょうどチョンチョンといった感じに出ている。私が作業服姿で庭の草取り、花への水やりをしていると、必ず何人かの子どもたちが同じように仕事を始める。

朝あわただしく送ってくる母親たちの姿も私にとっては楽しい観察である。

まあ、きょうはこのお母様はねぼうしたようだが、きげんの悪い顔。こんな時はことさらにっこりと「おはようございます」とあいさつする。

主任ということで、学級は担任していないが、全園児の担任と自負している。一四四名の園児ひとりひとりと目を交してあいさつをしたいと思います、ひとりとあいさつしているうちに他の子どもが洋服を引っぱって、自分の方へ向かせようとする。

門前のあいさつは送っていらした親たちにもしたい。十分間に計三〇八回おじぎをしなければならぬ計算になるが、実際は五人に一回くらいの割合になる。登園時間がすんで門にかぎを

をかけると思が、がっくり折れたようになる。でもこのあいさつが一日のスタートであり、親と教師が気持ちよく子どもを受け渡すひとときでもある。

子どもは遊んでくれる

私はあまり子どもに働きかけない。せっかく友だち同志遊ぶうとしてゐる時、またひとりで友だちの遊びをじっくりみて楽しんでゐる時、子どもはそれぞれ目的を持って行動していると思う。そんな時遊びましようよと押しつけがましく仲間入りするより、そばに立つたり、しゃがんでゐると、子どものほうから働きかけてくる。その中には「先生遊んであげようか」「先生と遊びたいなあ」「先生 そばにいてね」「先生に手伝ってほしい」「先生が入ると面白い」などそれぞれに内容がちがうので、見分けて参加している。

子どもたちは遊びの中に、先生がなにか新しい興味のあるものを教えてくれると期待している時がある。そんな時に待つてましたとばかりこっちの計画に乗せるような指導をする。

モルモットとの出会い

下町の公立幼稚園に担任として勤務していた時である。一学期の終りごろモルモットをいただいた。置く場所がなかったの

でボール箱に入れて廊下のすみで飼育していたが、紙なので掃除も気軽にできた。そのうち子どもたちもモルモットと名づけて、自分たちで飼育するようになった。ある日M子さんが、モルモットを抱くとおしっこをかけられるといつて、自分の手ふきタオルをおむつがわりにして抱き出した。とたんにおむつがほしいといい出す子どもも出て来たので、古いタオルを常時五―六枚用意しておいた。

そのころM子さんは両親が離婚して、新しい母親がきた。M子さんは登園すると一番早くモルモットをしつかり抱きしめて、いろいろ話しかけるようになった。M子さんにとってモルモットの感触は母親に対する甘えであり、さびしさをまぎらわす友だちであったと思う。世田谷区立幼稚園では飼育する場所もあるので、モルモット、ハムスター、にわとり、うさぎ、ねずみなどの飼育をして、どれも子どもをうませて、生まれた時の赤子の時から子どもたちと一緒に観察してみたが、また生まれた、今度は何匹生まれるだろうかとおもしろがっているうちに、幼稚園か動物園かわからなくなってきたので、途中から飼育物を少なくて、幼児教育に専念した。

しかし、私が飼育物に夢中になると、担任、子ども共に熱中して、動物のふんもいやがらなくなり、動物に対する愛情が養われてきたと思う。ふんがやわらかいか、かたいとか、何を

食べるとか、毛が抜けるとか、にわたりの卵はあたたかい、だくとどきどきしている、骨があるよ、どうしてうさぎの眼の色は赤いの、などと驚きやら疑問やら、家庭では経験できない豊富な経験をしたことと思う。

いろいろな飼育物でも、入園当初は慣れないので、恐怖感をもったり、扱いが悪くて危害を加えられたりしないように、特に計画的に、ひなや、子どものうちから飼育を始めて、一年後に成長しすぎたものは、買い替えて、いつでもだいたり、なでたり、自分たちで扱うことができるように配慮してきた。

自由保育のなかの子どもたち

独立園舎になっているので、自由保育の形態をとるには好都合である。しかし、一組四十名という定員では、担任がひとりひとりをのばす指導するには、負担が多く、十分な指導をすることは困難である。

幼児がみずから興味をもって行なう活動を助けたり、幼児のもっているものを引き出し、充実した楽しい活動を経験させたいと思って主として自由保育の形態をとっているが、果して自由保育といえるものかどうかは疑問である。経験の少ない担任が形だけの自由保育では、とかく経験や活動の内容が薄いものになるのではないだろうか、いつも反省をしながらも、若い

先生方が一生けんめい指導に当たっているのをみると、これが四十名を受け持った担任だと思い、定員がせめて三十名ぐらいならとぐちが出てしまう。

父母から、遊びが多すぎるとか、もっと字や数の指導をしてほしいとかの声はあったが、父母に教育目標を理解していただき、その目標に達するための指導形態をとっているということをも、一つ一つ例をあげて説明してきたため、最近是非常にのびのびとして、子どもが明るくなったという声を聞き、意を強くしている昨今である。だが道はけわしく、教育の現代化の声も聞かれるこのごろは、もういちど、指導方法を洗いなおしてみることがあると思っている。

子どもの笑顔に引きずられてにつこり

子どもの笑顔は自分の顔の反映であると思う。おや、K子さんはきびしい顔をしているけど、どうしたのかしらと思つてみると、自分の仕事疲れのきびしい顔があることを見い出す。

このごろ「先生遊びましょう」と職員室に声をかけてくるM君は、入園当初ちこくしてきて、恥ずかしさのため、母親を追って二メートルあまりあるフェンスのへいを乗りこえて逃げ出した。こっちも負けじと追いかけ、やっと体に手をかけると、下からするりと逃げる。また手をにぎって、家に帰るとがんば

るM君をなだめて、道一つへだてた小学校の校庭をひと回りしながら幼稚園にもどる。やっと門の所でだきあげて園庭に入れた。

M君に「Mちゃん、あんまり重いので先生疲れちゃった」というと、にやっと笑って彼は職員室に入ってきた。

一日職員室で遊んで、次の日からは自分の組に素直に入ったが、まだふらりと職員室に遊びにくる。割合広い職員室は、他の子どもがいないので家庭のような静けさを感じるのだろうか。職員室を息抜きの場にし、遊びにくる子どもは絶えない。

だが三学期ごろになると友だちどうしの遊びに夢中になってほとんど用事以外は出入りしないようになる。職員室に入ってきて、私をみつめてにっこりするの「ここですこし休ませて、保育室は少しうるさいので疲れたから」といっているようである。「いいですよ。疲れがとれたら元氣よく遊びに出かけなさい」と心で話しかけてにっこりする。

さて今ごろは

幼児教育と名がつけば、親は、子どもかわいさ、またわが子に対する教育の自信のなさか、本でもおもちゃでも高価なものを買い与えて、それで子どもの知能はのびるものと考えているのだろうか。幼児教育ということになると世の中の人は理解を

示したような態度をとるようであるが、現場はきびしいものであると思う。いつも幼児教育の先にあるものは両親教育と教師の育成にあると思うが、こちらのほうは現状を知らない人が多いのではないだろうか。

私たちの現場にも研修の機会はたくさんあるが研修に出かけたり、園内研修をする前に、明日の指導の準備、もろもろの雑用と称するものが、子どもを送り出して、職員室にもどった時に山と積まれている。しかしこれも子どもの指導につながるものと、ベルトコンベアの如くすませたつもりで張切って研修に出かける。

古い木にも花は毎年新しく咲く。研究することによってよい花を咲かせられるでしょうとある市長さんに言われたことがある。そしてよい花が咲いて研究が実ったら子どもにお礼をいうことを忘れないでともいわれた。

きょうも子どもに遊んでもらおうと張切って職員室を出るとたんにリーンと電話が鳴る。

(世田谷区立多聞幼稚園)